

保育(施設)実習指導の一環としてのボランティア活動の実際

～全国保育士養成協議会東北ブロック内における調査より(2)～

Actual status of volunteer activities as part of childcare (facilities)
training guidance

～From a survey within the Tohoku block of the Japan association of
Training schools for nursery teachers (2)～

時本 英知¹⁾ 日野 さくら²⁾ 三浦 主博³⁾ 竹之下 典祥⁴⁾ 瀬尾 知子⁵⁾
大迫 章史⁶⁾ 福田 真一⁷⁾ 細川 梢⁸⁾ 石森 真由子⁹⁾ 利根川 智子²⁾

Eichi TOKIMOTO¹⁾ Sakura HINO²⁾ Kimihiro MIURA³⁾
Noriyoshi TAKENOSHITA⁴⁾ Tomoko SENOO⁵⁾ Akifumi OSAKO⁶⁾
Shinichi FUKUDA⁷⁾ Kozue HOSOKAWA⁸⁾ Mayuko ISHIMORI⁹⁾
Tomoko TONEGAWA²⁾

¹⁾ 青森中央短期大学 ²⁾ 東北福祉大学 ³⁾ 東北生活文化大学短期大学部 ⁴⁾ 盛岡大学 ⁵⁾ 秋田大学
⁶⁾ 仙台白百合女子大学 ⁷⁾ 東北文教大学 ⁸⁾ 郡山健康科学専門学校 ⁹⁾ 聖和学園短期大学

¹⁾ Aomori Chuo Junior College ²⁾ Tohoku Fukushi University
³⁾ Tohoku Seikatsu Bunka Junior College ⁴⁾ Morioka University ⁵⁾ Akita University
⁶⁾ Sendai Shirayuri Women's College ⁷⁾ Tohoku Bunkyo College
⁸⁾ Koriyama Institute of Health Sciences ⁹⁾ Seiwa Gakuen College

キーワード：保育士養成、保育(施設)実習指導、ボランティア、実態調査

【背景と目的】

全国保育士養成協議会東北ブロックでは、保育実習指導の方法や内容を整理し、その望ましいあり方を検討するために「保育実習指導のガイドライン」を策定した。また、このガイドラインは新任教員や経験の少ない教員が多くなっている養成校の現状¹⁾から、保育実習指導の組み立てや展開につい

1 全国保育士養成協議会専門委員による「指定保育士養成施設教員の実態調査」によると、養成校における教員の勤務年数は他の高等教育機関教員の勤務年数よりも低く、さらに教員の年齢も若い教員が多い状況が報告されている。詳細は社団法人全国保育士養成協議会(2011)『指定保育士養成施設教員の実態に関する調査』報告書I-調査結果の報告-1,保育士養成資料集第54号,98頁と101頁を参照。

での悩みに向き合うための一助とする意図も含められ策定が始まった。

この「保育実習指導のガイドライン」作成と改訂にあたり、これまで全国保育士養成協議会に加盟する東北ブロックの各養成校の保育実習指導における指導内容の実態を調査し、その調査結果から実習教育の基本的な方針や指導内容の基本事項を明確にしてきた。平成25年に作成したガイドラインは見直しや調査を続けながら改訂を続けてきたが、「施設実習」に関する内容については検討が決して十分ではない状況であった。「施設実習」に関する実習指導は各養成校の担当教員からもその課題が指摘されており、先行研究においても具体的に指摘されている。たとえば矢野（2011）は「『保育』ということばかりか養成校側は保育所保育士養成に偏りやすい傾向にある」とし、「学生の一般的な意識としても、（中略）『保育所で働きたい』などの保育士＝保育所で働く事という意識が非常に強い」と述べており²、養成校や学生の「施設実習」に対する意識の低さを課題として指摘している。また、石山・阿部（2008）は「『施設実習』といっても（中略）その範囲は広く、施設養護の一般的な内容や実践技術・方法を学んでいく必要性が出てくる」と述べており³、実習施設の種別ごとに必要な情報や知識を実習前の学生に十分に伝達することの難しさを指摘している。

このように「施設実習」に関する実習指導に課題を抱えるなかで、各養成校では様々な工夫を取り入れながら指導を実施している。その一つとしてボランティア活動をはじめとした体験学習が挙げられる。ボランティア活動について新谷（2017）は「人間関係づくりの基礎コミュニケーション技術を学ぶ」、「自分の持っている認識枠や価値観の捉え直しの機会」、「幼稚園教育実習や保育実習に直接的につながる学びの機会」、「キャリア意識の向上」の4つの点において学生の学びにつながっている⁴としており、その有効性について述べられている。また、木村ら（2014）が実施した保育士養成校の体験学習（インターンシップ、見学実習、ボランティア体験等）の実施に関する実態調査によると、「ボランティア体験」は大学で60.9%、短期大学で83.3%が実施しているという結果を示している⁵。これらの研究結果は「施設実習」に特化したボランティア活動を対象としたわけではない。しかし、その効果と実施状況から考えると「施設実習」に関する学びを補完する目的でボランティア活動を取り入れ、そこでの学びを工夫しながら「施設実習」に関する実習指導に活かしている可能性は高いと考えられる。

そこで、本研究では施設実習に関する指導の一環としてのボランティア活動の実際に着目し、全国保育士養成協議会に加盟する東北ブロックの各養成校の実態を明らかにし、施設実習を効果的に行う

2 矢野陽子（2011）「保育士養成における施設実習の意義と事前指導に関する検討」,九州共立大学紀要 48(1), 129-138.

3 石山貴章・阿部孝（2008）「保育士養成機関における『施設実習』の現状と課題（Ⅰ）-短期大学『施設実習』に向けた事前指導を通して-」,九州ルーテル学院大学紀要 visio38,157-170.

4 この研究では教育実習や保育実習が本格化する前の基礎的教育機会として実施している「ボランティアワーク」という集中講座に参加した学生の学習成果をもとに調査されている。この授業は実習担当者が担当しているため実習との関連した活動内容となっている。詳細は新谷龍太郎（2017）「保育職志望学生におけるボランティア体験の意義」,平安女学院大学短期大学部保育科保育研究会保育研究 47,34-43 を参照。

5 調査は保育士養成校が実施（推奨、案内）しているボランティア体験について聞いている。そのため児童福祉施設の行事だけではなく学内外～地域における行事や被災地支援等も含まれており、必ずしも保育に関連するボランティア体験というわけではない。詳細は木村志保・津田尚子・山口将典・立花直樹・仲宗根稔・西元直美（2014）「保育士養成における体験学習の実施状況および教育効果に関する検討」,関西福祉科学大学紀要 18,87-93 を参照。

ための基礎資料とすることを目的とする。

【方 法】

1. 調査対象と手続き

本研究では全国保育士養成協議会に加盟する東北ブロック内の指定保育士養成施設において施設実習を担当する者を調査の対象とした。調査の手続きとしては平成28年11月27日に行われた「平成28年度全国保育士養成協議会東北ブロックセミナー北上大会」において、調査趣旨を説明したうえでアンケート用紙を配布し協力の依頼を行った。また、当日不参加の養成校に対しては郵送にて送付し調査協力の依頼を行った。

アンケート用紙の回答は12月下旬までに郵送での返信をお願いし、東北ブロックの全養成校の41校から回答が得られた（回収率100%）。

2. 調査項目と内容

本稿におけるアンケートの項目は①フェイスシート、②保育実習Ⅰ（施設）、③保育実習Ⅲ、④ボランティアの4項目で構成している。このうち④ボランティアに関する調査内容は次のとおりである。

(1) ボランティア活動について

「ボランティア活動実施の状況」、「ボランティア活動先の種別」、「ボランティア活動の内容」

(2) ボランティア活動を推奨するための体制について

「ボランティア活動推奨体制の状況」、「推奨のための具体的取り組み」、「活動の教育的・意義と期待」

(3) ボランティア活動における学生の動向の把握について

「学生の動向把握の状況」、「学生の動向把握の具体的方法」

3. 分析方法

本稿では調査項目のうち①フェイスシート④ボランティアの項目を活用し、実習指導の一環としてのボランティア活動に関する実態を把握するために、それぞれの項目ごとに量的分析を行った。なお、調査内容のうち(1)ボランティア活動についての「ボランティア活動先の種別」と「ボランティア活動の内容」、(2)ボランティア活動を推奨するための体制についての「推奨のための具体的取り組み」と「活動の教育的・意義と期待」、(3)ボランティア活動における学生の動向の把握についての「学生の動向把握の具体的方法」については自由記述による回答のため次の手続きを経て分析を行った。

(1) 各県の回答をデータ入力する担当者を決め、得られた回答をマイクロソフトExcelの共通フォーマットに入力する。

(2) 自由記述による回答に対して2名の分析担当者を配置。

(3) 分析担当者が記述による回答とそれに対する具体的な取り組みや内容についての説明を確認のうえ、意味の類似性から分類し、それぞれに仮の分類名をつける。

(4) 各分析担当者が分類したものを研究員会（委員10名）において確認と協議を行い、分類の修正と

分類名の確定をする。

(5)確定させた分類と分類名に基づき分析担当者が集計を行う。

【結果】

1. ボランティア活動の実施状況と種別・内容

①ボランティア活動の実施状況

施設実習指導の一環として学生がボランティア活動（実習先施設でのボランティア活動、施設以外での催し等のボランティア活動など）を行なっているか複数回答で聞いた結果を表1に示す。ボランティア活動の実施状況としては「学生が個人でボランティア活動を行っている」（22校）がもっとも多く、次いで「ボランティア活動を行っていない」と「学校が体制を整えてボランティア活動を行っている」（12校）が同数であった。なお、「学生が個人でボランティア活動を行っている」及び「学校が体制を整えてボランティア活動を行っている」の2つの選択肢に回答した養成校が5校あった。

結果から41校のうち29校が施設実習指導の一環としてボランティア活動を実施していることが明らかとなった。また、施設実習の一環としてはボランティア活動を実施していないが、幼稚園教諭や保育士資格の取得を目指す全ての学生に子どもに関わるボランティアを勧めている養成校も見られた。

②ボランティア活動先の種別

施設実習指導の一環としてボランティア活動を実施している場合、その活動先の種別等について自由記述で回答してもらったところ、29校のうち27校からボランティア活動先の種別についての回答があった。具体的な活動先として16の施設種別が挙げられており、具体的な活動先について触れられていない場合は「不明」とした。その集計結果は表2の通りである。ボランティア活動の実施先としては「障害者施設」（18件、66.7%）が最も多く、次いで「障害児施設」（9件、33.3%）、「児童発達支援センター」と「児童養護施設」（6件22.2%）の順に多くなっている。

結果から障害系の施設でのボランティア活動が多くなっていることが明らかとなった。また、回答では複数の種別でボランティア活動を実施している養成校が18校あり、多い場合は6つ

表1 施設実習指導の一環としてのボランティア活動の実施状況
(回答校=41校)※複数回答あり

項目	回答数
ボランティアを行っていない	12
学生が個人でボランティアを行っている	22
学校が体制を整えてボランティアを行っている	12

表2 施設実習指導の一環としてのボランティア活動先

(回答校数=27) ※複数記述あり

種別	回答数	回答校割合	種別	回答数	回答校割合
障害者施設	18	66.7%	学童保育	2	7.4%
障害児施設	9	33.3%	児童館	2	7.4%
児童発達支援センター	6	22.2%	高齢者福祉施設	1	3.7%
養護学校・特別支援学級	2	7.4%	保育所	3	11.1%
乳児院	1	3.7%	幼稚園	1	3.7%
児童養護施設	6	22.2%	避難者学習支援	1	3.7%
児童自立支援施設	2	7.4%	おもちゃライブラリー	1	3.7%
母子生活支援	1	3.7%	不明	5	18.5%
子育て支援事業	1	3.7%	回答数合計	62	

表3 施設実習指導の一環としてのボランティア活動の内容

(回答校数=27) ※複数記述あり

分類	回答数	回答校割合	分類	回答数	回答校割合
イベント・行事	22	81.5%	学童保育	1	3.7%
学童保育等における学習支援	2	7.4%	イベント開催	1	3.7%
児童デイサービス	2	7.4%	依頼内容に合わせる	1	3.7%
預かり保育	1	3.7%	内容不明	5	18.5%
訪問	1	3.7%			

の種別でボランティア活動を行っている養成校も見られた。

③ボランティア活動の内容

施設実習指導の一環としてボランティア活動を実施している場合、その具体的な内容について自由記述で回答してもらったところ、29校のうち27校から回答があった。その記述内容を8つの活動内容に分類し、また、活動内容について言及されていない場合は「不明」とし集計した。その結果を表3に示す。ボランティア活動の内容としては「イベント・行事」（22件、81.5%）が最も多く、その具体的な内容としては祭りや運動会・スポーツ大会、文化祭、旅行などの運営や引率、補助が中心であった。

結果から施設実習指導の一環としてのボランティア活動は一人の学生が一定の期間参加する継続的な活動ではなく、主に一回あるいは二回程度の参加となる単発的な活動を中心に参加していることが窺えた。

2. ボランティア活動の体制と教育的・意義

①ボランティア活動を推奨するための体制

施設実習指導の一環としてボランティア活動を実施している29校に対して、ボランティア活動を推奨するためにどのような体制を整えているか複数回答で聞いた結果を表4に示す。推奨するための体制として最も多かったのは「ボランティア、催し等の情報を学生に提示」（24件、82.8%）であり、次いで「ボランティア希望学生に教員が個別に対応（推薦状等）」（7件、24.1%）、「校内ボランティアセンター設置・担当職員による手続き」（6件、20.7%）、「学校がボランティアサークルを設置（教員が顧問）」（4件、13.8%）という結果であった。体制としては情報を学生に提供することが中心となっているが、ボランティア先によっては養成校からの推薦状等を必要とする活動もあり、教員や職員が学生とボランティア先の間に入り対応している状況も窺えた。

②ボランティア活動推奨における具体的取り組み

施設実習の一環としてボランティア活動を実施している場合、ボランティア活動推奨するためにどのような具体的取り組みを行なっているのかを自由記述で回答してもらったところ、29校のうち16校から回答があった。その記述内容を8つの取り組み内容に分類し集計を行った。その結果を表5に示す。ボランティア活動推奨のための具体的取り組みとして「教員が学生に声かけ等」（12件）による働きかけや誘いかけをしていることが具体的な取り組みとして最も多く見られた。また、複数の具体的な取り組みを行っている養成校もみられた。

表4 ボランティア活動を推奨するための体制

(回答校=29校)※複数回答あり

項目	回答数
ボランティア、催し等の情報を学生に提示	24(82.8%)
ボランティア希望学生に教員が個別に対応(推薦状等)	7(24.1%)
学内のボランティアセンター設置・担当職員による手続き	6(20.7%)
学校がボランティアサークルを設置(教員が顧問)	4(13.8%)
学内に学生主体のボランティアサークルがある(教員関与なし)	3(10.3%)
施設実習に関わるボランティアを授業として実施(単位化)	2(6.9%)
その他	3(10.3%)

表5 ボランティア活動推奨における具体的取組

(回答校=16校)※複数記述あり

分類	回答数
教員が学生に声掛け等	12
チラシの配布、掲示板に掲示	4
学内・学外の施設の活用	2
ボランティアを推奨・するよう指導	2
校内オリエンテーション	1
学生の希望を受けて依頼	1
実習後に学生が自分で依頼	1
ボランティア先から学生の状況を聞く	1

表6 ボランティア活動の教育的意義や期待

(回答校=6校)※複数記述あり

分類	回答数
体験から施設の学びを得られる	2
日誌の書き方の学びにつなげられる	1
施設イメージが良い方向に変化する	1
高い意識を持ち活躍できる人材育成につながる	1
ボランティア先と実習配属先がつながる	1
学生がレポートを作成する	1
就職につながっていく	1

表7 ボランティア活動における学生の動向把握の方法

(回答校=22校)※複数記述あり

分類	回答数
学生への口頭での確認	9(39.1%)
報告書(レポート、内容・時間数等の証明書含む)	7(30.4%)
事前の届け出	4(17.4%)
先方からの依頼文・学長決済	2(8.7%)
教員による引率	1(4.3%)

学生にとっては施設実習指導担当の教員から声をかけられることで、より「施設実習」を意識することにつながると考えられる。そのため、ボランティア活動を推奨するために「教員が学生に声かけ等」が多くなっていると推察される。

③ボランティア活動の教育的意義と期待

ボランティア活動の推奨における具体的取り組みについて記述していた16校のうち、6校においてボランティアの教育的意義や期待についての記述が見られた。その記述内容を分類した結果を表6に示す。記述内容は大きく事前学習に資する意義や期待としてあげているものと、学生の新たな学びや職場選択につながる意義や期待をあげているものの2つに分けることができる。まず、事前学習に資する意義や期待として「体験から施設の学びを得られる」、「日誌の書き方の学びにつなげられる」、「ボランティア先と実習配属先がつながる」が挙げられていた。さらに学生の新たな学びや職場選択につながる意義や期待として「施設イメージが良い方向に変化する」や「高い意識を持ち活躍できる人材の育成につながる」、「就職につながっていく」が挙げられていた。このようにボランティア活動は事前指導と事後指導のそれぞれにつながる教育的な意義や期待を養成校が見出していることが窺えた。

3. ボランティア活動における学生の動向把握の状況と方法

ボランティアを実施している養成校29校のうち、ボランティア活動における学生の動向を「把握している」が22校、「把握していない」が7校であった。このうち学生の動向を把握していると回答のあった22校が記した把握の具体的方法について、記述内容から5つに分類し集計した。ボランティア活動における学生の動向把握の具体的な方法は表7に示す。学生の動向把握の方法として「学生への口頭での確認」(9件、39.1%)が最も多く、次いで「報告書(レポート、内容・時間数等の証明書

含む)」(7件、30.4%)、「事前の届け出」(4件、17.4%)という結果であった。結果からボランティア活動はあくまで学生による主体的な活動であるため、その動向把握は「学生への口頭での確認」が中心となっていると考えられる。その一方で少数ではあるがボランティア活動ではあるが、養成校とボランティア先が公的な文章を交わして学生の動向を把握している養成校も見られた。

【考 察】

本研究は、施設実習を効果的に行うための基礎資料を得るために、全国保育士養成協議会東北ブロック内の各養成校に対する施設実習に関する指導の一環としてのボランティア活動の実態調査を実施し、整理を行った。その結果に基づく考察は次の通りである。

調査の結果から半数以上の養成校が施設実習指導の一環としてボランティア活動を実施していた。ボランティアを実施していないと回答した養成校においても、学生に子どもと関わるボランティア活動を奨めているとの自由記述も見られた。本調査においてはボランティア活動の教育的意義や期待についてはそれほど多くの記述があった訳ではないが、「体験から施設の学びを得られる」「施設イメージが良い方向に変化する」といった意義や期待を持ちながら養成校はボランティア活動を実施している。

平尾ら(2016)が実施した学生に対する「実習先の施設や利用児・者に対するイメージ調査」の結果によると、施設実習前の施設に対するイメージと利用児・者に対するイメージともに良くも悪くもない「どちらでもない」と回答した割合が比較的多く、その回答理由として「実際の施設に行ったことがないため、イメージがわからない」や「実際の利用児・者とかかわったことがいため、イメージがわからない」という内容の記述が多く見られたとしている⁶。学生が実習施設のイメージを持っていないとすれば、施設実習に向けての事前準備を進めにくい状況にあると言える。この状況において施設実習前の時期にボランティア活動を実施すれば、実習施設の確認や施設利用者とのふれあいを通して実習施設に対する具体的なイメージの獲得につながる可能性は高くなる。そして、その経験と養成校における学びを通して施設実習についてより具体的に考えはじめ、実習に向けた事前準備へとつながっていくと考えられる。

また、新谷(2017)はボランティア活動を通じて期待される学習効果の一つとして「これまで『当たり前』と思っていた風景が違ったように見え始める」というメタ認知の効果があるとしている⁷。この効果を考えると施設実習後にボランティア活動を実施すれば、学生自身が実習での自らの思考や行動に対して客観的に再確認するきっかけとなる可能性が高まる。そして、その再確認をきっかけに

6 調査によると実習前の実習先施設のイメージは「非常に良いイメージ」8.1%、「良いイメージ」52.4%、「どちらでもない」38.7%、「悪いイメージ」0.8%、「非常に悪いイメージ」0%であった。また、実習前の利用児・者へのイメージは「非常に良いイメージ」2.4%、「良いイメージ」28.2%、「どちらでもない」66.1%、「悪いイメージ」3.2%、「非常に悪いイメージ」0%という結果であった。詳細は平尾太良・土屋由美子(2016)「保育士養成課程における施設実習に関する一考察」、中国学園紀要(15),5-10を参照。

7 新谷はボランティア活動の中で起因する問題に直面し、自分の力ではどうにも越えられない壁を感じたり、自分の価値観では推し量ることのできない相手と場を共有したりすることがメタ認知のきっかけとなるとしている。詳細は新谷龍太郎(2017)「保育職志望学生におけるボランティア体験の意義」、平安女学院大学短期大学部保育科保育研究会保育研究47,34-43を参照。

利用者の理解や地域における施設の役割の理解をさらに深めることができると考えられる。

さらに、冒頭でも述べたが学生は「保育士＝保育所で働く事という意識が非常に強い」ため、特にそういった学生は「施設実習」に対して不安を抱いていることが多い。小佐々ら（2018）は「『子ども・利用者への対応』については、同一類型の施設や実習先でのボランティア活動により、その不安を軽減することができる」と指摘している⁸。この指摘は「子ども・利用者への対応」に関する不安であり学生が抱く不安の一部に過ぎないが、ボランティア活動を通して不安を軽減させることは可能である。しかし、ボランティア活動はあくまでも主体的な活動であることが前提であり、その活動理由が「施設実習の不安軽減のため」という状況は、ボランティア活動としては決して望ましいとは言えない。そのため、「施設実習の不安軽減」という意義は主体的にボランティア活動を進めるなかで、結果的に付随してくるものと捉えておくべきである。もしそれを中心的な目的として進める必要がある場合は、ボランティア活動という形ではなく教員が指導やフォロー等の介入をしやすい別の方法を検討すべきであろう。

本調査においてはボランティア活動を推奨するための体制や、学生の動向把握の方法について具体的な内容にまで踏み込んで確認することはできていない。ボランティア活動における学びと施設実習における学びを結びつけ、保育士としての成長につなげるためにはボランティア活動をただ体験させるだけでは十分ではない。ボランティア活動の意義を上手く引き出すためには、ボランティア活動を推奨するための体制を整えたり、ボランティア活動における学生の動向を把握したりすることも必要となる。ただ、木村ら（2014）がボランティア活動を含めた体験学習が「学生に対する個別対応や指導、実施施設との調整・訪問指導やフォローアップなどの教員負担が大きい」と指摘しているように⁹、どこまでその体制等を整え実施するかは養成校の状況に応じて十分な検討が必要である。また、時本（2014）が「『専門職を育成するために』という思いで大学や教師が一方的に介入していくことは、そもそもボランティアの要素を奪うことにつながりかねない」と指摘しているように¹⁰、ボランティア活動本来の意義を大切にしながら導入することが求められる。

【参考文献】

1. 新谷龍太郎（2017）「保育職志望学生におけるボランティア体験の意義」,平安女学院大学短期大学部保育科保育研究会保育研究47,34-43.
 2. 石山貴章・阿部孝（2008）「保育士養成機関における『施設実習』の現状と課題（Ⅰ）－短期大
-
- 8 ただし、これらの不安要素を改善するためには、大学生自身が主体的に行動する必要があるとしている。詳細は小佐々典靖・城戸裕子・鈴木靖之（2018）「保育士養成校における施設実習に対する不安と変化」,浜松学院大学教職センター紀要（7）,39-52を参照。
- 9 教員負担が大きいにもかかわらずボランティア体験や見学実習、インターンシップなどの体験学習が養成校で実施されていることから学生実習教育としての有効性についても言及している。詳細は木村志保・津田尚子・山口将典・立花直樹・仲宗根稔・西元直美（2014）「保育士養成における体験学習の実施状況および教育効果に関する検討」,関西福祉科学大学紀要 18,87-93を参照。
- 10 ボランティア活動は活動者の自主性が重要としつつも、保育者や支援者としての学びにつなげるにはただ体験させるだけでは十分ではなく、段階によっては介入が必要であることも言及している。詳細は時本英知（2014）「養成段階におけるボランティア経験が保育者・支援者の実践に与える影響について－知的・発達障がい児に対するスポーツ活動のサポートを通じた学びのプロセス」,地域福祉サイエンス創刊号,153-163を参照。

- 学『施設実習』に向けた事前指導を通して－」,九州ルーテル学院大学紀要visio38,157-170.
3. 石山貴章・阿部孝・田中誠（2010）「保育士養成機関における『施設実習』の現状と課題（Ⅱ）－実習事後指導を通じた『自己評価』と『気づき』に関する分析から－」,九州ルーテル学院大学紀要visio40,59-72.
 4. 木村志保・津田尚子・山口将典・立花直樹・仲宗根稔・西元直美（2014）「保育士養成における体験学習の実施状況および教育効果に関する検討」,関西福祉科学大学紀要18,87-93.
 5. 小佐々典靖・城戸裕子・鈴木靖之（2018）「保育士養成校における施設実習に対する不安と変化」,浜松学院大学教職センター紀要（7）,39-52
 6. 時本英知（2014）「養成段階におけるボランティア経験が保育者・支援者の実践に与える影響について－知的・発達障がい児に対するスポーツ活動のサポートを通じた学びのプロセス－」,地域福祉サイエンス創刊号,153-163.
 7. 平尾太良・土屋由美子（2016）「保育士養成課程における施設実習に関する一考察」,中国学園紀要（15）,5-10.
 8. 矢野陽子（2011）「保育士養成における施設実習の意義と事前指導に関する検討」,九州共立大学紀要48（1）,129-138.

【付 記】

本研究は、一般社団法人全国保育士養成協議会より平成28年度ブロック研究助成、全国保育士養成協議会東北ブロックより平成28-29年度共同研究助成を受け実施したものの一部である。また、本論文は日本保育学会第71回大会（平成30年5月13日,宮城学院女子大学）にて発表したものを加筆、修正したものであることを附す。

